

「地域と育む未来医療人『なごやかモデル』」活動報告(2)

—名古屋市緑区鳴子地域における「医薬看連携地域参加型学習」—

名古屋市立大学看護学部

土井 愛美, 明石 恵子, 山口 知香枝

医療系学部・研究科連携教育委員会

I. はじめに

「医薬看連携地域参加型学習」は、医学部医学科、薬学部薬学科、看護学部看護学科の連携教育であり、平成21年度から実施されている。その一環である名古屋市緑区鳴子団地「おひさまカフェ」での学生の活動が「地域と育む未来医療人『なごやかモデル』」(文部科学省平成25年度未来医療研究人材養成拠点形成事業、以下「なごやかモデル」)のきっかけとなった。「なごやかモデル」として展開した当初、名古屋市緑区鳴子地域(以下、鳴子地域)での活動は1チームであったが、26年度は3チーム、27年度から5チームと増えている。また、名古屋学院大学リハビリテーション学部の学生が平成26年度から加わった。

本稿では、「医薬看連携地域参加型学習」の全体像を簡単に紹介し、平成29年度の名古屋市緑区鳴子地域における学生の活動を報告する。

II. 「医薬看連携地域参加型学習」の概要

1. 授業目標

本科目は、医療人を目指す学生としての最初の授業として、教養教育に位置付けられている。医療の基本技能と態度、課題解決型学習能力、チームワーク能力、医療人としてのプロフェッショナルリズムの習得を目標としている。そして、エイジング・イン・プレイス(AIP)社会における医学・医療の発展と向上の必要性を理解し、医療のプロフェッショナルとしてそれを担う使命感と、その多職種協働能力の基盤を習得することを目指している。

2. 授業概要

本科目は、①オリエンテーションと講義、②基本医療技能実習、③臨床体験、④地域参加型学習による課題研究で構成されている。学生は、10名前後の学部混成チームを形成して学習を進めるとともに、一つの地域や施設などを担当し、現場の協力者や教員の指導を受けて、地域・施設のニーズや課題に取り組む。

学習の中心となる地域参加型学習は、名古屋市をはじ

めとする愛知県、岐阜県、三重県内の地域や施設などの協力を得て実施している。年度によって若干の違いはあるが、平成29年度は、9地域(団体を含む)、18施設の協力が得られ、学生は27チームに分かれて活動した。各チームに担当教員を配置し、地域・施設などと学生間の連絡調整をするとともに、直接および情報通信技術の活用により学生の活動を支援している。

3. 評価方法

本科目の評価は、①出席、②臨床体験レポート、③課題研究プレゼンテーション、④ポートフォリオの4つの視点で行う。課題研究は各チーム個別に取り組むとともに全体で活動計画発表会、進捗状況発表会、課題研究発表会を行い、その内容や表現手法などを学生同士で評価している。また、本科目の目標に掲げられている学生のチーム力とプロフェッショナルリズムについては、Webシステムによって定期的にチーム力評価と学生相互のピア評価を行い、その結果を速やかに学生にフィードバックしている。

III. 平成29年度「医薬看連携地域参加型学習」

1. 概要

本科目の初回到学部混成チームを形成し、第2回目の授業で担当する地域・施設を決めた。各チームではリーダーと連絡係の学生を決め、最初に、担当する地域・施設の概要や過去の学生活動を調べて地域診断を行った。その後、地域・施設を訪問して協力者から指導を受けたり、住民や施設等の利用者から情報を得たりして課題を見つけ、その解決に向けた活動を展開した。各チームの主な活動を表1に示す。

2. 名古屋市緑区鳴子地域における活動

1) A1チーム：たすけあい名古屋(鳴子地区NPO法人)

(1)活動内容

「高齢者の孤立を防ぐ」をテーマとし、鳴子地域住民の交流の場となっている「おひさまカフェ」で運営

表 1 平成29年度「医薬看連携地域参加型学習」における主な活動

チーム	担当地域・施設	主 な 活 動
A1	たすけあい名古屋	「おひさまカフェ」の運営補助 病気別食事指導ポスターとロコモトレーニングポスターの展示
A2	土曜サロン・緑区社会福祉協議会	「土曜サロン鳴子」への参加 脳トレビンゴやコグニサイズなどによる地域住民の交流の場づくり
A3	鳴子団地自治会	かまどベンチによる災害時炊き出し交流会や認知症勉強会への参加 血圧をテーマとする学習会の開催
A4	新鳴子	鳴子おむすびフォーラムにおける「伝承遊びわんぱくランド」ブースの共同開催
A5	暮らしの保健室	なごやかサロンや技術体験会への参加 サロンでの「夏バテ予防献立」の説明と「みどりっち体操」の紹介
B	名古屋市厚生院	施設の見学と入居者や職員からの情報収集 認知機能低下予防を目的とする創作脳トレ体操の実施
C	桜山商店街	AU自立の家訪問と車椅子利用者からの情報収集 車椅子視線のビデオ撮影、車椅子マップの作成
D	博物館・瑞穂通商店街	かかりつけ薬局・薬剤師の認知度に関する調査 博物館前商店街新聞へのかかりつけ薬局の重要性に関する記事の掲載
E	汐路小学校区	地域交流会やディーサービスセンターなどでの高齢者との交流 介護予防・筋力向上プログラムへの参加
F	御劔小学校区	手洗いと歯磨きの実態調査 正しい手洗いと歯磨きのリーフレット作成と配布
G	瑞穂保健所	ベンギンクラブと子育て講演会への参加 「子どもの事故予防と対処」の発表とリーフレット配布
H	総合リハビリテーションセンター	施設の見学と療養者・職員からの情報収集 「ペットボトルボウリング」の実施とクリスマスカードづくりの補助
I	あいち健康の森	健康公開講座、工作教室、健康科学教室への参加 秋の展示における食をテーマとするストラックアウトの実施
J	精神保健福祉センター	精神障がい者の就労と就労継続支援・就労移行支援事業の現状把握 精神障がい者の就労における課題の発見
K	笠寺病院	在宅医療への同行、在宅医療・介護連携市民向け講演会への参加 市民・学生への在宅医療に関するアンケート調査と結果の病院への還元
L	大同病院	慢性閉塞性肺疾患（COPD）と結核の学習、呼吸器フォーラムへの参加 院内広報誌と院内ポスターによるCOPDと結核の早期受診啓発
M	稲沢厚生病院	通院患者に対する健康上の関心の調査 疲れ目の原因・疲れ目体操・正しい目薬の指し方についての講座開催
N	旭労災病院	音楽療法カンガルークラブ、発達支援センター、発達支援外来の見学 放課後等ディサービスRAKUDAでの手洗い指導
O	知多厚生病院	防災訓練の傷病者役体験による災害時健康被害防止対策の検討 産業まつりでの座位ステッピングテスト実施とロコモ予防ポスター発表
P	蒲郡市民病院	夜間救急外来の見学と医療従事者からの情報収集 病院祭でのコンビニ受診の問題や救急医療情報センター等の説明
Q	豊川市民病院	医師・ケアマネージャー、脳卒中患者・家族からの情報収集 脳卒中発症直後の患者の不安軽減を目的とする脳卒中パンフレット作成
R	渥美病院	地域特性からハウス農業における脱水の危険性への着目 病院祭での脱水症対策のポスター展示とパンフレット配布
S	足助病院	足助村塾拡大版と足助ふれあいまつりにおけるロコモ予防と食事の見直しに関する発表
T	上矢作病院	上矢作病院の診療や訪問看護の見学、上矢作中学校の訪問 防災訓練における被災者役体験
U	三重北医療センター いなべ総合病院	いなべ市民感謝祭におけるロコモティブシンドローム予防講習会（ロコモ度チェック、握力測定、 予防運動の指導など）の開催
V	三重北医療センター 菰野厚生病院	病院見学、認知症予防体操教室見学 介護予防体操教室における誤嚥予防体操の紹介
X	東部医療センター	ペインクリニックの見学 学生・市民を対象とする慢性疼痛とその対処法に関するアンケート調査

の補助や利用者との交流、アンケート調査を実施した。

高齢者から身体に関する悩みなどを聞いて、坂が多いなどの環境問題、足腰の衰えや栄養などの健康問題を明らかにした。また、そこから見えてくる高齢者の身体に関する課題を分析し、高齢期の主な病気に焦点を当てた病気別食事指導ポスターや筋力増強プログラム（ロコモトレニング）ポスターなどを作成した。そしてそれらを緑区区民まつりや年忘れ健康ふれあいまつりに参加して発表し、地域住民に学習の成果を還元した。その他、鳴子おむすびフォーラムへの参加やスマートフォンの使い方ミニ講座を開催した。

(2) 成 果

学生は、これらの活動を通して様々な場面で地域住民と関わる事ができた。また、高齢者との交流によって普段の大学生活では知り得ない高齢社会の現状を知り、健康問題や日常生活への関心を深める事ができた。

2) A2チーム：土曜サロン・緑区社会福祉協議会

(1) 活動内容

独居者の孤立防止につながる地域住民間の交流の場や高齢者との触れ合いの場づくりを通して、鳴子地域の活性化をはかることを目的とする活動を行った。

最初に社会福祉協議会の会議に参加し、住民の憩いの場である「土曜サロン鳴子」には、若い世代の参加を促したいというニーズがあることを知った。これに対して学生ができることを検討し、土曜サロン鳴子に参加した。ボランティアが企画した歌や手話、体操に参加したり、学生の企画として昔遊びや脳トレビンゴ、コグニサイズなどを実施したりして住民との交流を図った。さらに、その成果を把握するため、参加者を対象としたアンケート調査を実施した。その他、緑区区民まつりや鳴子おむすびフォーラムに参加し、住民との交流を図った。

(2) 成 果

参加者を対象としたアンケート調査結果から「若い人と接する有意義な機会だった」「孤独感がなくなり社会とのつながりが多くなる」などの感想が得られた。参加者の満足度は高く、土曜サロンを学生の力で盛り上げることができた。若い世代の参加を促すことまではできなかったが、昨年度の課題であった「体を動かす企画」を実施し、鳴子地域のコミュニティを活発にするきっかけづくりとなった。

3) A3チーム：鳴子団地自治会

(1) 活動内容

「高齢化団地における防災と健康」をテーマとし、鳴子団地の住民がより良い暮らしを続けるために住民

同士の交流を促進し、防災と健康について学ぶ機会を提供した。

毎月の鳴子団地自治会定例会に参加し、団地住民の高齢化率は40%を超え、急な坂道や階段が多い環境であり多くの住民が不便さを感じていること、住民同士が交流する機会は少ないことを知った。そこで、団地のかまどベンチを活用した災害時の炊き出し交流会に参加するとともに、健康に関するアンケートを行った。その結果、住民の多くは1日3回食事をとり、日常的に運動を継続しているが、認知症と高血圧に対する不安をもっていることがわかった。そのため、次の交流会で、血圧をテーマにしたクイズ形式の学習会を実施した。その他、緑区区民まつりや鳴子おむすびフォーラムに参加したり、認知症徘徊勉強会（主催：鳴子団地自治会、後援：UR、講師：いきいき支援センター介護福祉士）で共に学び、高齢者に対するサポート的な役割を担ったりした。

(2) 成 果

自治会員から「学生さんが参加してくれると場が華やぐ」「活気が出る」「いつでも歓迎」などの感想があった。学生自身は、自治会定例会や交流会に参加する中で、高齢者の健康と生き方、地域の環境、住まいなど、直接住民の話を聞く機会を得て視野が広がった。また、地域の高齢化の課題を共有し、高齢者の思いに寄り添うことで、自分たちの活動を考えることができた。

4) A4チーム：新鳴子地区

(1) 活動内容

「世代間交流を通じた学習」をテーマとし、鳴子地区任意団体主催の鳴子おむすびフォーラムで「伝承遊びわんぱくランド」ブースを共同で担当した。

毎月の新鳴子地区定例会への参加と現地調査によって、新しい住民の流入による人口増加と高齢化伸展の現状から、住民同士の交流や世代間交流の場が必要であることがわかった。学生の立場で行える活動を検討し、「伝承遊びわんぱくランド」ブースを社会福祉協議会や保育園と共同で担当することとなった。初めての試みであったため参加状況の予測が難しい中、ブース担当者間の共通目標とイメージ化などの打ち合わせを繰り返し、会場を見学し、ブースで使用する道具を作成した。また、通所介護施設を訪問して高齢者から伝承遊びを教えてもらった。当日の参加者は少なかったが、乳幼児から中学生など幅広い年代の参加者に応じて安全面に配慮し、紙芝居読み聞かせ、将棋崩しやカルタ、フルーツバスケットを実施した。

(2) 成 果

学生は地域との連携の実際を体験的に学ぶことがで

きた。地域のルールや慣習、望んでいることに合わせる難しさを感じ、情報収集の重要性を再認識できた。また、多世代交流の大切さを実感し、若い世代が地域の歴史の伝承や助け合う環境作りなどの大切な役割を担っていることを知ることができた。

5) A5チーム：暮らしの保健室（CHCセンター内）

(1)活動内容

「地域と対話し、健康に生きる」をテーマとし、地域住民と触れ合いながら健康維持に関する活動を行った。

暮らしの保健室の見学と周辺散策によって、坂が多いことや元気な高齢者が多いことを感じた。そのため、「夏を元気に乗り切ろう！」をテーマとするサロンを企画して、「夏バテ予防の献立」をスライドで説明し、「みどりっち体操」を紹介した。また、健康測定会に参加して、測定会参加者と折り紙を通して交流した。その他、なごやか暮らしの保健室で開催された名古屋工業大学主催の技術体験会、地域で開催された緑区区民まつりと鳴子おむすびフォーラムにも参加した。

(2)成 果

高齢者が多く、世代間の対話が行き届きにくい鳴子地区において、学生は、地域住民と対話を行いながら健康維持についての活動を行うことができた。また、活動を通して、どのように対話することが医療人として求められるのかについて改めて考えることができた。

IV. おわりに

活動拠点となった鳴子地域は、高齢者が多い一方で、若い世代の住民も増加している。その中で各チームは、高齢者の孤立予防や世代間交流、健康維持などを目的とする様々な活動を展開した。現地の環境を調査し、住民の生の声を聞くことで地域の課題やニーズを発見し、学生の立場でできることを考えて実施した。それによりわずかながらも、鳴子地域の活性化に貢献したと評価できる。

また、本稿では詳しく紹介していないが、鳴子地域以外の地域・施設でも様々な活動が展開され、27チームの活動は課題研究発表会で報告された。これらは大学内では決して学べない貴重な体験であり、未来医療人として超高齢社会の課題に気づき、自分の役割を考えるきっかけになったと思われる。

しかし、この地域参加型学習には多くの課題もある。たとえば、多くの活動が授業時間外に行われるため、他の授業や課外活動などの影響を受ける。そのため、チーム内での情報共有や役割調整が不可欠であるが、それがうまくできないチームも発生する。また、活動地域・施設が広域であるためチーム間で交通費の負担が異なり、学生の不満となっている。これらにどう取り組むかは、来年度で10年目となる「医薬看連携地域参加型学習」の大きな課題である。

最後に、これまでご協力、ご指導いただいた地域・施設の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

